

50年の友情に感謝して

坂本清音

思い返すと、甲元さんと知り合ったのは、今から46年前の1974年、彼女が大学院1年に遡るらしい。(昔のことは全て「忘却の彼方」となっている私には、彼女との出会いの時期をトント思い起こすことができず、彼女の助けを求めた)。

それは甲元さんの大学院生1年目で、当時、私は専任講師になったばかりだったのだが、松平千秋先生のラテン語クラスに、先生の許可を得たとは言え、潜り込ませていただいていたらしい。「共に初級の文法は済ませていたので、院ではいきなりカエサル著の『ガリア戦記』を読まされました。予習が大変でしたが面白かったです」とのこと、読んだ書物のことはすっかり忘れていたが、共に机を並べて勉強したことは流石に覚えている。以来、甲元さんが専任になられてからも、二人でラテン語やイタリア語のクラスに潜ったり、間をおいてではあったが、互いの研究室を往き来して、『欽定訳聖書』の「ヨブ記」とか「伝道の書」や「箴言」など知恵文学と分類される書を、実直にも分担を決め、何種類かの『注解書』を調べてきて、読んでいた。スペンサーの *Faerie Queene* もともかく通読しましょうと、全巻を声に出して読むという「遊び」もした。最後はギリシャ語の勉強会で、私の定年後であったが、ベテランの工藤弘志先生をお招きして、カーペンター先生と三人で熱心に楽しく勉強した。その時だけ甲元研究室は珈琲店「化け猫カフェ」(人間に化けた……でも化け方が非常に拙い……トンマな猫が開いているカフェの意だったそう)に変身し、カフェのオーナーに美味しい珈琲を淹れてもらい、ちょっとしたお菓子を食べながらのお喋り付きであった。勉強の開始時には、聖書の「主の祈り」をギリシャ語で唱えて、という敬虔なものであったが、今覚えているのは「木はデンドロンと山からオロス」くらいであ

る。

ともかく教員として在籍していた時代の、彼女との関係はやはり勉強好きの友人同士だったと言える。現在私は、同女大をリタイアして15年になるが、現役時代と同じ感覚でお交わり頂いているのは、同じ職場にしながら、同僚としてよりも友人として過ごしていたからではないだろうか。彼女の精神年齢が16歳の差を感じさせないほどマチュアなのと、私の悪い癖で、若い方の年齢にすぐに同調してしまうことも一因かもしれない。

彼女と行き来したのは研究室だけでなくお家にもよく招いて頂いた。本人が「ナマハゲ親父」と呼ぶ、「ガンコで口うるさく、気難しく、神経質な」父上とは、ご生前にお宅でお目にかかったことはないと思うので、気ままに出入りさせていただいたのは、母上と弟君の3人になられた後のことだっただろう。ただしいつも、現在「コニクラ爺」と呼ばれるようになる弟君の不在の時であった。(因みに、この「コニクラ爺」さんからは、私が昔のことを聞くために、甲元さんのアポを取ろうとした時に、「世間はみんなテレワークやで」と反対された恨みがある。しかしそのお陰で、Q&Aで答えてもらった「生の言葉」を、ここで多く引用させてもらっている)。私たちがお邪魔すると、いつもにこやかに優しく迎えてくださるお母上にお会いすることも、甲元家を訪ねる大きな楽しみであった。その母上が天国に召されてもう5年になるが、残された姉弟は、母上のことを「ノン気で朗らかで面白くて可愛い、実に愛すべき、そしてとても大切な人」「年をとっても頭が柔軟で、咄嗟にパツとジョークを口にしたりするので、弟と『あの頭の柔らかさは特別やったなあ』と今も思い出しては感心して」おられるとのこと、何かと小憎らしいことを言う弟君も、母上に対する思いでは一致しておられるようである。

私の見るところ、娘洋子さんには、この母上の多くのDNAが受け継がれており、職場や教室で見せている柔和なお顔と謙遜なお人柄は、まさに「母

上そのまま」である。が反面、メール等で露出過剰と言えるほどにあからさまに発せられる内面の声は凄まじいのである。残念ながら、これは個人情報なので公にはできない。

そこで、同志社教会の『月報』に、2011年11月から、ペン・ネーム「みー子の母」で毎号掲載されている「教会万華鏡」（今年の3月で91回）のエッセイを通して、職場では公にされなかったウラの甲元さんを紹介したい。実は、甲元さんは1983年、イースターと誕生日が重なった年に32歳で受洗されたので、もうかれこれ35年以上の同志社教会員の仲間でもある。その第1回目は流石に「放蕩息子の兄」と題して、聖書に基づく真面目な内容だったが、5回目くらいからは、堰を切ったように、「ここからは『のろけ話』になり恐縮なのですが」と断った上で、愛する「お猫さま」の話が続々と顔を出してきた。漱石の場合は「吾輩は猫である。名前はまだない」と冒頭で紹介される1匹の猫が最後まで主人公役で筋は進むが、彼女の場合、「男の中の男〈猛、タケ坊〉」が登場して以来、「この猫を見よ〈困太郎〉」「夜明けのキャット〈マキャベリ〉」と次々雄猫の話が続き、最後は、甲元家最後の雌の飼い猫〈みー子〉で終わる、全て love song である。もちろん、その一つ一つが、「みーこの母」の膨大な読書量に裏打ちされた豊富な vocabulary と緻密に組み立てられた plot、思わず吹き出しそうな巧みな simile、そして完璧な story teller 作の逸品なので、つい面白おかしく読んでしまうのであるが、要するに、底抜けの「愛猫礼賛」である。

そこまでは、読み手は「あ、そうですか」で終わればいいのであるが、〈みー子〉初登場の、「猫に聞かせた日本昔話」の冒頭で、昔話「浦島みー子」の話を書く〈みー子〉の態度がどうも思わせぶりである。この号がある意味〈みー子〉追悼号であったようで、著者の精神状態がやや不安定であったことは想像できる。しかしそれにしても、「〈みー子〉はいつも居住まいを正し、目をまん丸にして食い入るように私を見つめ、私語もせず、ガムも噛

まず、居眠りもせずに集中して聞いてくれました」と描写されると、「むっ！もしかして彼女の中では、お猫さまこそが『正しく清く生きている』理想の学生と考えておられたのかも」と単細胞の坂本は心配になってきた。そこで、この機会に是非とも「みー子の母」に正しておかねばと、正面切って質問をさせていただいた。「甲元先生は、学生よりも猫の方が好きか」と。

その答えは「はい、その通りでございます。学生が全員、猫であったらどんなに楽しい教員生活だったかと思いますが、逆にそれだと今頃、寂しくて鬱になってますね」だった。どうやら甲元さんは、矛盾と愛の交錯する現世の職場を、学生と猫の狭間を行き来しつつ深く思索して、45年に及ぶ教員生活を乗り越えてこられたようである。

まあ猫のことはさておいても、彼女と私の間の共通項はあまりにも少ない。二人とも勉強好きではあったが、研究の対象もアプローチの方法も、現世あるいは現実に対する考え方も身の処し方も、相当異なっている。きっとそのことに双方は気づいていながら、しゃーないなあと受け入れている。あまりにも異なるので、互いに呆れて面白がって来たのかもしれない。これからもこのような気づきを与えられながら、末長く仲良くして頂ければと願っている。

甲元先生は去る2月6日の最終講義で「Feeling Good—いい感じ—」と題して、含蓄の深いお話を聞かせて下さった。いよいよ「40年余の教員生活の軛を外され」て、これから始まる「自由」の生活の行方に想いを馳せ、それは決して「はしゃいで飛び跳ねる類の単純な喜びではなく、少し陰りを帯びた静かな感慨」だと纏めておられる。大人だなあ、深いなあ、とひたすら敬意を評しつつ、これからの先生の前途をお祝いしたいと思う。